
夢人荘の人々 後編

森 イツキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢人荘の人々 後編

【Nコード】

N7568S

【作者名】

森 イツキ

【あらすじ】

夢を追いかける女の子のお話。後編です。

そんなわけで私は祥子ちゃんの部屋に入れてもらった。部屋にすることがあまりないからなのか、年ごろの女の子の割に置いておけるものは多くない。どちらかというと閑散としていると行っていい。サルと一緒に住んでいるのだから、もっと散らかった状態を予想していたけれど、部屋は至って整然としている。

「ここに引越して、お客さんが来たのって、多分初めてです」

祥子ちゃんはぱたぱたと部屋の中をせわしなく移動しながらそう言った。私には完璧に片付いているように見える部屋でも、本人にはまだ気になるところがあるのだろうか、雑誌類を片付けたり、流しにたまった食器類を洗ったりしている。

なんとなく落ち着かない。部屋自体はほとんど同じづくりの筈なのに、住む人間が違うだけで、全く別の空間に変わるのだな、としみみ思った。

「そうなんだ。ねえ、ここに越してきてどのくらい？」

水道水の流れる音がかすかに聞こえる。

「もうすぐ、半年くらいですかね」

キッチンで洗い物を済ます祥子ちゃんの背中越しから、女の子特有の、ふわりとした声が聞こえる。

「コーヒー入れますね」

慣れた手つきでコーヒーの準備をする祥子ちゃん。私は、ありがとう、と言いかけて、何か野性的な視線を感じ、その視線の先をちらりと見やった。

サルが、私を見ていた。

「モンちゃん！」

思わず叫んでしまった。

モンちゃんはすっかりとした足取りでとことこと私に向かって歩いてくる。颯爽とした態度で、毅然とした表情。立派なおサルさんだ。

モンちゃんは私の眼前で静止すると、ぺこりと一礼した。私も思わず姿勢を正して礼を返す。

モンちゃんは踵を返し、とことこと隣の部屋へと消えていった。あとは若いお二人さんで、といったような按配だ。

「立派なおサルさんねえ」

私は正直な感想を述べた。祥子ちゃんの肩が少し跳ねたようにびくっと動いた気がした。嬉しかったのだろうか。

「えへへ」

祥子ちゃんは、マグカップにインスタントコーヒーの粉を入れながら、少し笑った。

やがて準備を終え、マグカップを2つ持って祥子ちゃんが私に差し出してくれた。

「どうぞ」

「あ、ありがとう」

目の前に差し出されたコーヒーを少しだけ飲んだ。おいしい。人に入れてもらうコーヒーってなんでこんなにおいしいんだろう。心まで温まるような、そんな感じ。久しく人にコーヒーを入れてもらうなんてなかったから、それもあるのかもしれない。

「やっぱり、変、ですか？」

「ん？」

何が、と言いかけて言い淀む。そうか、サルと暮らす女の子が、ということだろう。

「まあ、あんまり聞いたことないね」

「私も、聞いたことないです。私以外に見たことないです」

祥子ちゃんは少し俯いているように見えた。落ち込んでいるのだろうか。自分と似たような境遇の人間が周囲にいない、という事実は、私達くらいの年の子には結構堪えるのだ。

「話、聞いてくれますか？」

祥子ちゃんは私の眼をじっとみつめて離さない。小顔だ。そして丸い顔。ご近所のおばさま方に健気な顔立ちよねえということの人

気の出そうな素朴で温かな顔。商店街で働いていたら鼻屑にしてしまいそうな顔だ。

「私でよければ、いくらでも」

小説のネタになるかも知れないし、とかあざといことを考えてしまおう私。

祥子ちゃんはどこか遠い目をしながら滔々と語りだした。

「私が、まだ高校生の頃、といっても一年近く前のことですけど」

私は彼女の話を通らさないよう、しっかりと彼女の話に意識を傾けた。

「雨の日でした。もう、何日も、降り続いていました。私は何の変哲もない女子高生で、特に何の目標もなくて、とりあえず地元の大学に行くために、なんとなく受験勉強してました。なんだかぼんやりと日々を過ごしていた時でした」

大抵の人間はそんなもんだよ、と肩を叩いてあげたいところだ。

私も、全く同じだった。あまり流れに外れないように、出来るだけ波風立たない場所にしようとしていた。それが正しい道だと思っていた。いや、本当は思いたかったただけなのかも知れない。その方が楽だったから。

「そんなある日の学校の帰り道でした。たまたま、視界に入ったんです。もしかしたら、もっと前からあったのかも知れないけど、気づいたのがたまたまその日だったのかも。道の片隅に、段ボール箱が置いてあったんです。可愛がってください、ってマジックで書いてありました。

最初は、子犬か子猫かな、と思って、ちょっとだけ覗いてみようと思っただんです」

「もしかして・・・」

「そう、その段ボールに入っていたのが、モンちゃんだったんです
あれまあ。

「私、もう、なんかこれは運命なんだと思って、気がついたらモンちゃんを抱きしめて走っていたんです。傘も放り投げて、雨に打た

れながら。なんだか、もう言葉にできなかつたんです」

なんと言葉を返していいか分からない。

「家にモンちゃんを持ち帰って、サルを飼いたい、って言ったら、両親に大反対されました。受験前で忙しい時に、何を言ってるんだ、しかも犬か猫ならまだしも何でサルなの？そもそもどこから連れてきたの？元に行ったところに戻しておいで、と言われて。

でも、私は出来なかった。これはきつと運命なんだ、と思って。

自分の部屋に無理やりモンちゃんを連れ込んで、もうその時には家を出る決意をしていました。」

なんだろう。何をどうしていいのかわからない。こんなに言葉に困るのは、生まれて初めてかもしれない。

「私、生まれてからずっと、平坦な人生だったんです。特に夢もないし、これといった特技もないし。これからもずっとこんな平坦な人生が続いていくんだろうな、と思ってたし、それはそれで仕方がないことなんだろうな、って思っていたんです。でも、ある日、捨てられていたサルを拾うことになるなんて、これはもう運命だっと思ってたんです。それに、段々知ることになったんですけど、モンちゃんは本当に賢くて、それこそ人間なんじゃないかって思ってしまっくらいい。」

だから、私、モンちゃんとなら、きつと凄いことが出来るような気がして。思い立ったら吉日だ！と思って」

ひよっとしたら、私と彼女は似た者同士なのかも知れない。むしろ、彼女のほうがぶっ飛んでいるような気がする。

「日本全国をモンちゃんと回る、旅の猿回し芸人を目指して、頑張ってみようって。私にはなにもないけど、モンちゃんにはすごい才能があるから。絶対にモンちゃんなら全国でも人気者になれる、そんな素質があると思うんです」

ほとんど言葉を発していない私の方が喉が渴いてしまったので、手元にあるコーヒーを飲んだ。熱々なのも構わずに結構な勢いで飲んだ。

「私、両親にその事を伝えて。私、何気に一度決めたら曲げない頑固な女なんで、両親も最初は断固否定したけど、最終的には私の熱意に押されたみたいで、両親の知り合いでアパートを経営している人がいるから、とりあえずそこでしばらくモンちゃんを過ごしてみ、それから色々考えてみたらいいよ、って言われたんです」

「その両親の知り合いが寺河さん、ってわけね」

祥子ちゃんはこくりと頷いた。

「そうなんです。知り合いのところに預けるなら、両親も少しは安心できるからということだったんでしょね。それに、モンちゃんとの独り暮らしもすぐ私が耐えられなくなつて帰つてくると踏んでたんでしょけど」

まさか商店街の八百屋でモンちゃんと一緒に看板娘&看板サルとして活躍しているとは、ご両親も想像出来なかつただろう。

「仕事先は意外とすぐに見つかつて。やっぱりモンちゃんと一緒に働ける仕事が良かったし、いきなり猿回しの芸を全国回つてやるだけの技術もお金もないし。とりあえずは地道にお金を稼ぎながら頑張つていこうって、そう思つたんです」

凄い人だ。自分とそう年も変わらない女の子が壮大な夢を持ってひたむきに努力している。私は背中を押される思いがした。

「それは、すごいね。本当にすごいよ、祥子ちゃん」

私は心からそう思った。中々誰にでも出来ることはない。ほんの偶然から、一步を踏み出し、今も着実に、堅実に一步一步目標に向かって歩みを続けている彼女を、私は素直に尊敬する。心ない人は彼女をちよつと頭のおかしい女だと揶揄するかも知れないし、相当の変わり者だと思つたろうし、事実私もついさっきまではそう思つていた。

「いや、でも、まだ全然、夢の背中も見えないです」

立派だよ、十分、確実にあなたは夢に向かってまっすぐ進んでるよ。私なんか今進んでいる方向があつていかどうかすら分からないのに。なんだかも、羨ましくもある。

「いつか、たくさんのお客さんの前で芸を披露できる日がくるよ」
「そうだったら、本当嬉しいです。全部モンちゃんのお陰ですけどね」

モンちゃん、あんたいい人に拾われたよ。それより一体どこの誰だあんな賢いおさるさんを捨てた不届き者は。

「あの、ミツチーさんは何を目指しているんですか？」

「あ、ああ、私？」

急に私の話になったので、多少面食らってしまった。

「私は、小説家になりたいんだ」

「小説家！すごい！」

祥子ちゃんは目の前にいる私を、ベストセラー作家でも目の当たりにしているかのようなキラキラした眼で見ているので、私は例えるなら良心的な詐欺師の心中のように、心を痛めてしまう。

「目指すだけなら誰でもできるよ」

「目指して行動することから夢は近付くんですよ、これ、私の持論です」

と言つて祥子ちゃんはてへつと笑った。サルにも劣らず可愛い笑顔だ。

彼女とは、いい友達になれそうだ。私はそう確信した。

祥子ちゃんとは、また近いうちに八百屋に買い物に行く約束と、今度ごはんを一緒に食へに行く約束をして別れた。香川に来て初めて出来た友達。私はとても嬉しかった。

小説家になりたい、と思った。皆の夢が叶えば一番、最高だ。祥子ちゃんと私は、なんだか共通点が多い気がした。夢に確実に近づいている。しかも迷いなく。そんな彼女に、私はなんだか焦りのようなものを感じていた。

がんばろう、とりあえず、がんばろう。モンちゃんから手渡しで売ってもらったバナナをほおばりながら、私はそんな事を強く思った。

わがままを言わせてもらえるなら、正直、まともな人と関わりたい、
とうのが最近の私のもっぱらの希望であつたりもする。

いろいろと濃いメンバーとの交流を重ねる中で、私もそんな一風
変わった人達が住む荘の一員なのだと思うと世間の常識的な社会か
ら隔離されたような気持ちになり少々せつない。

こちらに来てから買った、プーさんの目ざまし時計は正午を指し
ている。九月も半ばになり、厳しかった残暑も大分なりを潜めてき
てくれて、朝晩なんかはむしろ涼しいくらいだ。本当なら、そろそ
ろ大学の後期がスタートする時期で、大学生達は残り少ない休暇へ
の憂鬱と、また始まるうとしていいる単位争奪戦に備え力を蓄えてい
るのだろうか。

でも今の私は休学中の身であるから、そういった大学生達の葛藤
とか辟易とかいった感情とは無関係の場所にいる。まあ、違う部分
での葛藤を常に抱えてはいるわけだけど。

まともな人生を歩んでいる感じではまったくくないなあ。と我なが
ら感じる。まともな人用に用意された人生のレールには完全にそっ
ぽをむかれてしまった感は否めない。その道を選んだのは自分なの
だから仕方ないけど。

ぐうううう。

おなかすいた。ゾンビを模倣したかのような歩みで冷蔵庫にまで
這って行き、その扉を開けてはみたけれど、ポカリ、水、きゅうり、
それにいつまでの期限だったか分らない卵が2個、私の空腹を満た
してくれるようなものは何も入っていない。

ピーン、と私の脳裏に大家さんの顔が浮かぶ。ちょっと気が引け
る思いがしつつも、今から食材を買いに行く元気も、外で食べるほ
どの金銭的余裕も今の私にはない。

気づくと私は手に携帯を持って、寺河さんの携帯番号を探してい
た。

寺河さんは、二つ返事でお昼ご飯をご一緒させていただくことを了解してくれた。いつでもご飯食べに来てくれていいのよ、と言ってくれてはいたのだが、ただでさえ安い家賃で住ませてもらっているのに、ご飯までごちそうになるのは気が引ける思いがしていたので、ここに引越してから今までは、私からはほとんどごはんをやっかいになることはなかったのだ。

着替えも早々に自分の部屋を出た私。ご飯が食べれる、となるとゲンキなもので、足取りも軽い。颯爽と階段を降り、大家さんの部屋の前まで来た私は、チャームを押す。

「はい」

寺河さんがドアの向こうから現れる。相変わらず今日も可愛いらしい。

「あ、すいません、いきなりごはんお願いしちゃって」

と私が申し訳なさそうに告げると、

「全然いいのよ、今日は誰も来ないから、ちょっと寂しかったから良かった」

と言つて優しく笑ってくれた。素敵な人だ。

「ああ、でもまだ全部完成してないのよ。今肉じゃが作ってるんだけど、もう少しかかりそうなの。そう、よかつたらその間、みつちやんに一つお願いしたいんだけど、いい？」

と言つて私に両の手を合わせてお願いされた。特に断る理由もないし、むしろお世話になりまくっているのは私のほうなので、喜んで、と了承した。

というわけで私は今、商店街に来ている。あの私が密かにお気に入りの閑散としつつも微妙な賑わいを随所で見せている、そう、サルがバナナを売ってくれる八百屋のように不況の合間を縫って独自の進化を遂げている商店街だ。何気に日本で一番か二番目に長いらしいということを最近知った。

なぜ私が商店街に来ているのかと言うと、寺河さんの頼まれごと

を済ますためだった。

寺河さんから頼まれたこととは、ある人を呼んできてもらいたい、ということだった。そのある人、とは夢人荘に住む住人である「ケント」という人だ。

ケントさんは画家志望の30歳で、県内外のいろいろな場所で自分の書いた絵をフリーマーケットスタイルで売っている人なのだそう。もう五年くらい夢人荘に住んでいるらしいのだが、ほとんど夢人荘に帰ってくるのがないらしく、酷い時は三ヶ月以上帰ってこないことも結構あるらしく、家賃の支払いが滞ることがあるらしい。ふと現われては数か月分の家賃を払いに来て、またしばらく姿を見せない、といったことの繰り返しで、話を聞くには結構なレアキャラらしい。今日はこの商店街で絵を売って、昼くらいには帰って家賃を払いに行く、という連絡が寺河さんにあつたらしい。というのは昨日の話で、一日中待っていても一向に現れず、とうとう昨日は現れなかったそうで、もしかしたらまだ商店街で絵を売っているかも知れないので、もし見かけたら引つ張ってきてほしいと頼まれたのだ。スナフキンの実写版みたいな人間なので、捕まるかどうかは微妙だけど、そこにいる可能性は高いので、一通り見てきてほしい、とのことだった。

絵を売っている、というのは大きな目印になるので、こんな地方でそんなことをしてる人もほとんどいないので、もしそんな光景を見かけたら間違いなくその人がケントさんだろう。しかしケントさんというくらいだから、やっぱり外国人なのだろうか。言葉が通じるのだろうか、心配だ。

商店街の入り口からずっと出口に向かって歩いてみたけど、それらしい人は見当たらない。もうこの商店街にはケントさんはいないのだろうか、と半ばあきらめながら歩いていた。

祥子ちゃんのバイトしているお店でバナナでも買って帰ろうか、と思っていた矢先、視界の奥で、それらしき人影が見えた。頭にタオルを巻いた男の人が座っている。無精ヒゲが顔の下半分に無秩序

に生えている。目は切れ長で、透き通っていて、純粹な印象を与えている。ここではないどこか遠くを見ているようで、思慮深い人なのだと思います。十分だった。タオルから生えている黒髪は大分伸びさらばえていて、長髪、と言っていいくらいには長かった。商店街には不似合いなアロハシャツを着ている。目が開いているのに寝ているんじゃないか、と違ってしまいくらい微動だにしていない、ただ座っている。そんな感じだった。

その人の前に、大小の絵が合わせて10点程飾られている。近づいて絵を一点一点見させてもらうことにした。突き抜けるような大空の絵。青と水色、その中間にあるであろう様々な水色、抜けるような空の絵、絵心の全くない私でも、何か大きなパワーが秘められているのを感じる。次の絵を見る。深海。深く、暗い海の底。なんだけがよく分らない深海魚が数匹、不気味な存在感を放っている。その上空は力強い光を放っていてその対比が印象的だ。その他にも、ホワイトタイガーとライオンの合体したような動物の絵や、子供達が楽しそうに笑っている絵。クジラとイルカの絵。猫の絵は本物の猫を閉じ込めているかのような画だった。写真と間違える人もいるかも知れない。

そして、一番目を引いたのが女の人の絵。とても優しそうな表情をして、背景には桜の花びらが舞っている。春を連想させる絵だ。そして、その中央の女性がどこかで見たことがあるような気がした。「上手いだろ」

急に話しかけられたので、私は思わずびくっとなる。

「あ、はい、凄い上手ですね」

「だろ」

と言って男は笑った。

「才能がある上に努力家だからな」

と言って笑う。どちらかといえば自信家だ、と思う。

「あなた、ケントさんですか？」

と私はストレートに聞いてみた。

「ああ、そつだよ、ミツチー」

いきなりあだ名（しかも浅田さんに付けられた）でよばれて私は心底驚いた。

「私のこと、知ってるんですか？」

「ああ、浅田から聞いた。あいつ喜んでたよ。いい原作者が手に入った、って」

手に入った、って、まるで私が浅田さんのモノになったみたいなの言い方で気にいらなかったがここは黙っておくことにした。

「浅田さんとも知り合いなんですね」

「あいつの絵はいい。気持ちも入ってる。ただちよつと根本的にアホだから。キミみたいな聡明な子がついていてやればプロの漫画家になれる可能性はかなりある」

「にやつと笑うケント。ざんばら頭なのに、なんだ畜生、かなりのイケメンだ。」

「ミツチー、って呼んでいいかい？」

なれなれしい人だ。画家志望の人ってもつと繊細な人だと思っただけ、むしろ古着屋の気さくな兄ちゃん、って感じた。

「オレはケント。兼ねるに人、って書いてケントだ。外人みたいでカッコいいだろ」

「かっこいいですね。顔も割と好きな方です」

と私が真顔で言ってみると、ケントはぶはつと空気を吐き出して大袈裟に笑った。

「そつ面と向かって言われると照れるね。ミツチーもケントって気軽によんでくれ」

そのどこか日本人離れた空気を感ずるのは名前だけではない。

「わかった。ケント。私は小説家を目指してる大向美智です。ミツチーでもみつちゃんでも好きに呼んでくれて大丈夫です」

ケントはくつくつと笑っている。

「キミ、なかなか面白そうな子だな。あそこにはどうも一風変わった人が集まるようになってるんだろつな」

ケントは青々と映えるジーンズのポケットから煙草を取り出した。私は煙草に詳しくないからその煙草がどこの銘柄なのか、有名なものなのかは解らないけど、とてもケントに似合っていると思った。

「ん？人が煙草吸ってるのがそんな珍しいか？」

気がつくとは私はケントの顔をぼろりと眺めてしまっていたみたいだ。

「いや、そういう訳じゃ」

ケントは煙草をゆっくりと吸いこみ、口から煙をふうふうと吐き出した。身体に悪そうな灰色の煙が眼前に一瞬現れ、ほんの数秒もしないうちにすぐ空気に紛れて消えた。

「もう少し、待ってくれる？」

「え？」

ケントは椅子代わりにしている木箱に座り込んだまま、静かにそう答えた。

「ユキのところに、滞納してた家賃を払いに行くつもりだったんだけど、少しだけ足りなくてさ。もうちょっと粘らせて。昨日の昼飯までには帰るって言っちゃったからユキには悪いけど、少しばかり遅れても金が足りないよりかはいいだろ」

ユキ、と言われて誰の事を指しているのか一瞬わからなかったが、そうか、大家さんの名前が確か由紀だったことを思い出して納得する。というか家賃分のお金がまだ用意できとらんのかい、とツッコミを入れたいくなる。確かに、路上で絵を売っているような画家のはしくれ（と勝手に断定してしまふのは失礼かもしれないが）がお金持ちであるとはどうにも思えない。きつとギリギリの生活をしているのだろう。第一そうでなければ家賃を滞納したりしないだろう。

「じゃあ、呼んでくるように言われたんで、私も一緒に待ってます。いいですか？」

と私がケントに尋ねると、ケントは目を細めて笑顔を作って、オフコース、と言った。

行き交う人の数はいつもより多い気がするけど、絵に目を留める

人はあまりいない。暇なので、ケントを観察することにした。ところどころ穴があいてたり、ほつれたりしているのだが、それがなんともしえない味になっているジーンズ。黒のタンクトップに、沖縄のお兄ちゃん連中が着てるようなアロハシャツ。顔は、ちょっと彫りが深い、間違ひなくカッコいい部類に入る。もうずいぶん長い間切っていないことが伺える長髪は、ゴムで束ねてなんだか随分と様になってる。なんでも見透かしてしまっような、透明感のある切れ長の目。油断すると吸い込まれてしまっような、確かな魅力がある。

モテるんだろっな、と思う。飾ったところも全くないし、純粹に絵が好きで夢を追いかけている人、って感じだ。

女のカンだけど、きつと大家さんと過去に何かあったんだと思う。きつと並び会えば、それはもう美男美女のとてもお似合いな二人だ。私のカンは、結構するどいと自負している。

時間が、ゆつくりと流れていく。行き交う人の数は土曜日の昼日中ということもあってかいつもよりは多い。時折、立ち止まって絵を見ていく人も何人かいる。けれど大半は、一瞥をくれるか、気づきもせず通り過ぎていくだけ。皆それぞれに用事や仕事やら、やらなければいけないことがあって、絵に気を留めるだけの余裕がないのだろうか。それはなんだかとても哀しいことのように思う。

ふと、横顔でケントの顔を見た。自分の絵に関心なく行き交う人々を見て、彼は何を想うのだろう。わずかに笑みを含んだようなその横顔からは、その胸中は窺い知れない。

日の光が一瞬、影に覆われた。何事かと思い頭上を見ると、右手に手提げの鞆を持った、初老の紳士風の男が立ち止まっていた。老眼鏡の向こうからでも垣間見えるおおらかな空気が、無条件に感じの良い人、という印象を抱かせる。

「ほう、この絵は、お嬢さんが書いたのかい？」

「え、あ、いえ、違います」

いきなりの質問に戸惑う。焦って横目にケントを見ると、くっく

つと笑っている。

「あ、この人です。この人が描いたんです」

私は焦りを隠しきれないまま、乱暴にケントの方を指差した。

「はは、どうです。じいちゃん。どれか気に入ったのあったら、おひとついかがですか?」

ケントは取り乱す風もなく、まあいつもこんなことをしているのだろうから慣れているのだろうけど、早速営業モードに入っている。ついさっきまで、店で客がこないで暇そうにしてる露天商のおっちゃんみたいだったのに。

「これ、いいね。空の絵」

おじいさんが指差したのは、私が一番初めに目に留まった絵だ。

抜けるような空の青。そんな色どうやって出すんだろう、っていうくらいにたくさんの青が折り合って、一つの空という壮大な空間を形成している。本物よりも本物に見える空の絵。出来れば私が欲しいくらいだ。

「お客さん、お目が高い」

「いくらかね?」

絵の相場なんて勿論わかるわけではないけど、結構良い値がついてもいいんじゃないか、って思ってしまう。

「うーん、苦手なんだよね。自分で自分の作品に値つけるの」

ケントは目を瞑ってうんうん唸っている。

「お客さん、いくらがいい?」

急に閃いたようにケントが眼を開いて言った一言がそれだった。

「え?」

おじいさんは、当然驚きの表情を見せる。

「お客さんが100万ていうなら、もちろん100万円喜んで受け取るし、100円だっていうなら、100円でいいよ」

なんとという、大胆な値段設定!ええのかそれで。私は口あんぐり。しそつになるのを必至で堪えて無表情を装う。

「こりゃ困ったな。はっはっ」

戸惑いながらも、おじいさんはなんだか嬉しそうだ。

「うーん。嫁さんとの結婚を決めた時より悩むな」

おじいさんの洒落に、ケントはまたくっくつと笑った。なんだか幸せな空間がそこには出来ていた。

「じゃあ、五万でどうだい？今それしか持ち合わせがなくてね」

少し残念そうな顔でおじいさんが言った。

「うーん、うん。うん。・・・よし」

ケントは、幾らでもいい、と言っていた割に何か決めかねているような、そんなちよつと濁すような科白だった。

「うん、じいちゃん、10000円でいいや」

え？と声が出たのはおじいちゃんと、私と両方だったようだ。

「え？本当に？いいのかい？」

とおじいちゃんは勿論ケントにそう質問する。

「うん。オレがいいって言ってるんだから、いいよ」

「ほ、本当にいいのかい？」

依然戸惑いを隠せないおじいさんをよそに、ケントはさっさとおじいさんが購入した空の絵を紙袋に詰めていた。

「はい、10000円ね」

ケントはおじいさんに紙袋を渡す。おじいさんは反射的にその紙袋を受け取って、おそろおそろ、といった具合に財布から10000円札を取り出し、ケントに渡した。

「毎度あり」

ひとさし指と中指で10000円札を挟んで、ケントは二カつと笑った。

おじいさんはとても満足そうな表情を見せて、深く一礼をして去って行った。ケントはずっと、おじいさんの背中が見えなくなるまで、ずっとずっと見守っているようだった。

「あの、なんで？」

「五万円のチャンスをファイにしてまで10000円でいい、って言ったのか？って」

見透かされている。それでもその答えを、ケントの本意を知りたかったのでうんうんと頷いた私。

「じいちゃん、手提げカバン持ってただろ」

「あ、はい。見ましたけど」

「そのカバンが開いててね、ちょっとだけ、将棋の本が入っているのが見えたんだ」

「はあ」

「じいちゃん、たぶん60は超えてるよな。で、まだ会社で働いてるっていう格好でもなかったし、ちらつと将棋の指南本が見えたんだ。たぶん、これから仲間内で将棋でも打ちにいくんじゃないかな、って思ってたんだ。そんな時、ある程度手持ちがないと将棋も打てないだから、持ち金全部使ってまでオレの絵を買うことはない、って思ってたんだ」

「そ」

そんなことまで、考えてたんだ。何も考えてないような顔して。そのへらへらとした顔の奥には何が詰まってるんだろう。

「まあ、そんなの俺の勝手な想像だから、真相は知れないけどな。とりあえず、今日はあと1000円だけ手に入れば、家賃の滞納分は足りるから、それで十分だ。さあ、ミッチー、金さえ入ればさっさと行こうぜ」

と言うや否や、ケントはとても手際よくシートの上に並べていた絵を回収していた。さっきまでフリーマーケットの様相を呈していた売り場がどんどんと何もなかった元の姿へと戻っていく。あつという間に売り場はケントの荷物鞆の中に収納された。

「よし、行くぞミッチー」

「あ、待って」

ケントは私を待つ素振りもなく、さつさと夢人荘の方へ歩いていく。私は取り残されまいと駆け足でケントを追いかける。

とりあえず、この一件で私がケントに好感を持ったことは言うまでもない。

寺河さんの部屋で、ケントと三人で肉じゃがをほおぼっているナウ。なんだか不思議な感じだ。肉じゃがはいうまでもなく絶品で、付け合わせのポテトサラダも、胡瓜の漬物も申し分ないのだけれど、なんとなく、私邪魔じゃない？という疑念が生まれる。二人とも至っていつもどおりである風に見えるのだけれど、なんだか寺河さんがぎこちない、気がするのよこれは女のカン。

「ユキ」

「はい？」

「浅田も来るって、さっきメールしたら、返事が来た」

ケントは携帯の画面を寺河さんに見せてへらへらしてる。ここに来て早々、滞納していた家賃を寺河さんに渡してからは、特に自分から会話をすることもなく、時折会話に相槌を打つだけで、後はただうすら笑いを浮かべてテーブルの前に座っていたのだけれど、やつと口を開いて放った一言は、そんなどうでもいいことだった。

「ああ、じゃあ、もう一人分用意しないと。作りすぎちゃったから、丁度よかった」

寺河さんは連絡を受けて、俄然ぱたと忙しくキッチン周りで準備を始めた。私はと言うと、ちよつと居づらい感じを依然引きずっていた。せめて同世代の子が一人でもいてくれたら。

そうだ。

「あ、寺河さん。私も、祥子ちゃん呼んでみてもいいですか？」

寺河さんがぐるりと振り返る。

「あら、祥子ちゃんとも知り合いになったのね。そうね、せつかくだから全員集合しちやいましょう。モンちゃんも一緒にね。ふふ」

そんな訳で、五人プラス一匹の大所帯になった。

祥子ちゃんは連絡したときには丁度バイトが終わって夢人荘に帰ってくるころだったので、簡単に捕獲できた。モンちゃんも一緒に来た。ちゃんと座ってバナナをもくもくと食べている。この場合

のもくもくには二つの意味がある。

浅田さんはケントと旧知の仲であるらしく、楽しそうに二人で喋っている。浅田さんが無駄にうるさく喋っているのをケントがにやにやしながら聞いている。

「ケントさん、ですよ、あの人。カッコいいですね、なんか男臭い感じが」

祥子ちゃんは意外に面食いな一面を垣間見せている。私もうんうんと頷く。

「でも付き合ったら苦労するよ。あのタイプは」

と私は付き合ってもいないのに勝手に分析して勝手に切り捨てている。なんて偉そうな。

「そうよ、苦労するわよ。ハイ」

いつの間にか話を聞いていたのか、寺河さんがビール、チューハイ、おつまみの枝豆、フライドポテトをお盆いっぱいに乗せてやってきた。本気なのかどうなのか、経験者は語る、とでも言うような口調だったのでそこは突っ込んだ話をしてもいいものなのかと迷う。「今日は飲んじゃいましょう。皆が集まることなんて中々ないしね」と言つて寺河さんは私にチューハイを渡してくれた。久しぶりにお酒を飲むなあ、大学時代はよく飲んでたなあ、つてそんな昔の話でもないのに。

「おい、ケント。俺はそろそろ漫画家デビューするぞ」

浅田さんが大声でケントにうそぶいている。

「本当か？浅田」

「おうとも。なんてつたつて今はミッチーが原作だからな！」

と言つて浅田さんは私を見た。凝視だ。

「ひい」

ちよつと怖かったので、思わず声が出てしまった。

「ミッチー、ずいぶん浅田に好かれてるんだね」

「オレの絵と、ミッチーの話が合わされば、イケる！そんな気がするんだよオレは」

浅田さんの目はランランとして輝いている。

「そんな風に言われると逆にプレッシャーです」

「でも、私浅田さんとミッチーさんの合作マンガ、読みたいです。もし本屋さんに二人の本が並んだらめっちゃくちゃ素敵ですよ」

それは、そうだ。そんなの、滅茶苦茶素敵だ。

「ミッチーの書いた小説も、早く本屋に並べて欲しいよね」

ケントがそんな大変なことをさも簡単に言っただけ。

「そんな」

でも、それが私の目標なのだ。改めて思うと、随分と大それた目標だ。

「ケントの夢は？」

自分の話題が続くのが嫌だったので、ケントに聞いてみた。聞いてみたかった。

「俺？俺はね……………」

ケントは目を瞑って頭の中を歩き回っているようだ。

「俺は、死ぬまで絵を描くことかな」

「それって、なんか、究極ですね」

祥子ちゃんが真顔で語る。確かに、それ以上の目標って、ある意味ない気がする。それは本当に自分が最後の最後まで貫かないと達成できない究極の目標だ。

「凄いですね」

心から思った声が、そのままだ。

「ん。だろう。まあ、ずっとこんな感じさ、俺は」

浅田さんが急に立ち上がりトイレに直行している。たぶん飲みすぎで吐き気をもよおしたのだろう。寺河さんはあらあら、と言った感じでお水を用意しに行った。

ここにいる皆は、芯が強い。私も、そうありたいと強く願った。

その次の瞬間、急に睡魔が襲ってきた。後の記憶は一切、ない。

夢を見た。

私は、父さんの部屋にいる。父さんの部屋は、まるで小説家の書斎のように本で埋め尽くされている。そっだ。

私は、父さんが仕事で家にいないことをいいことによくこの部屋に入り浸っていた。

まるで本屋に迷い込んだかのように、視界が書棚で覆われている。古書の匂い。静かな空気。落ち着く。

私がお気に入りの本が、ここにはある。「夢物語」という小説だ。作者は伊藤あゆみ。奇しくも私のお母さんの旧姓で、しかも同じ名前だ。本の隅々まで見渡したけれど、この著者が他に書いた作品はないようだし、父さんの本棚にも夢物語以外のこの著者の作品は置いていなかった。もしかすると、著者が世に出した本はこの一冊だけなのかもしれない。

ストーリーは、ずっと地元暮らしで特に将来の目標もないまま、特に就きたいわけでもない地元の会社に就職した女性、由佳という女性が主人公の、まあよくある感じの話だった。

由佳は、特にお金を持っている訳でもなく、大した趣味もやりたいたこともなく、幼い頃からずっと自分の部屋や図書館で本を読んでいた。いつしかそれが趣味となり、休日はよく地元の図書館に足を運ぶようになっていた。

ある日、由佳は図書館の、地元出版社主催の小説公募のポスターを偶然見かける。これだ、と思い小説を書くことを決意する。しかし、いくら本をこれまでたくさん読んできたからといって、いきなり小説が書けるはずもない。悪戦苦闘する由佳。いろいろとストーリーを練っては見るものの、どれもありがたき、しかも大した文章力もないし、構成力もないわけで、こんなの読んでも誰も面白くない、と自分で自分を諷める日々がつづく。

もう、自分を主人公にして、私の過去を面白可笑しく書いて、都合の良い未来も書いてやる、と完全に方向転換する由佳。

ヴィジュアル系バンドの追っかけをして、ボーカルが昼ごはんでは使った割りばしまで採集するという、友人に話すと引かれまくりの、暗黒の高校時代。両親がさっさと結婚しろと日々プレッシャーをかけてくる就職後の喧噪。これしかない、っていうものがない自分の人生の空虚さ、全てを笑いに変えて、存分に笑ってもらおうとする由佳。自分が小説賞に投稿し、グランプリを受賞するなんてストーリーを小説の空想世界で爆発させる作者には、なんだか私の背中を押してくれているような気さえした。

そして、授賞式で出会う編集者の男性に一目ぼれしてしまう由佳。どうにかこうにか押しに押しして、結局付き合うことになり、程無くして妊娠が発覚する。

あっさり母親になることにした由佳。父親となる編集者は、もう小説は書かないのか？と由佳に尋ねる。

「私は、あなたのためだけに生きていけます。百恵ちゃんみたいで、カッコいいでしょ？」

と、家庭に入り、小説をすっぱりと書くのを止めてしまうのだ。

せつかく、賞も獲って、自分の本が出版されて、次の作品の執筆オファーもあるのに、なんでそんなもつたいたいことをするのか、と周囲の人は由佳に尋ねるが、由佳は決して小説を書こうとはしなかった。自分の持てる出来る限りの時間を、夫の、家庭のために使いたい。それが、母となった私の気持ちです、と。

私はこの小説を読んで、なんで自分がやっと思つた、自分がやりたいことをそんな簡単に放棄できるのだろうか、と疑問に思つた。ずっと、ずっと、初めて小説を読んでから10年が経つた今も、心の奥で、魚の骨みたいに引っかかっている。だから、私は小説家になろうと思つたのかも。

本が好きで、そのうち読む側から書く側に、受け取る側から与える側に立ちたい、と思いつてから今日まで、私は、私は。

視界がおぼろげになり、次第にぐるぐると渦巻いた。

目が覚めた。いつもの夢人荘の私の部屋の天井がそこにはある。父の書斎じゃない。私だけの、部屋だ。

なんだかとても喉が渴いていたので、むくりとベッドから起き上がった私は、キッチンまでよろよろと歩き、蛇口をひねり、水道水をがぶがぶ飲んだ。いくらかはましになった。

今日は、図書館に行ってみよう、と思った。

高松図書館は高松市内電車に乗り、太田駅という駅で下車し、そこから歩いて十五分ほどの距離にある。図書館の隣には、高松大学工学部があり、学生さんはちらほらと見かけるが、静かな場所であることは間違いないかった。

香川県の中心地である高松市駅周辺から、電車で約三十分ほど下ったところにある。最も、私は高松市駅と、太田駅のちょうど中ほどにある栗林公園という公園の近くに住んでいるので、アパートからそこまでは二十分弱で行くことができる。

図書館の中は静まりかえっており、クーラーが効いているのも手伝ってか、涼しげな印象を受ける。夏休み中の学生の姿もここに見てとれる。夏休み中の図書館ではおなじみの光景であることは、どこの図書館も同じようだ。

二階に上がった。一階の方が席数は多いのだが、生憎ほぼ学生さんで埋まっていて、一人推敲にふけることができるような状態ではなさそうだ。

二階なら、一階よりは少しは座れるスペースがあるだろう、いや、むしろあってくれないと困るな、などと思いつながら一歩ずつ踏みしめるように階段を上っていった。外はうだるような蒸し暑さだが、室内は至って快適で、もうしばらく外に出たくないな、と思ってしまう。

幸運なことに、席はぱらぱらと空きがあり、私は奥の目立たない席に座った。

手投げカバンに入れてある空想ノートを取り出し、机の上に広げる。

実は昨日、それまで書いていた小説を全部消去してしまった。

なぜか昨日になって、今まで書いていた小説は、ありきたりで、面白みのない、どうしようもない小説であるような気がしたので、こは思い切って1から取り組もうと、パソコンの中からバックアップも残さずに、完全に消し去ってしまったのだ。

正直、衝動でやってしまった部分もあるので、後悔の念がないわけではない。でも、同じ夢人荘に住む面々を見て、私も普通ではないような気がしたのだ。何か皆、自分を曲げない強さのようなものを持っていて、多少世間とずれていようが自分の道を突き進んでいく、そんな屈強な精神を持った彼らを見て、私も、もつとぶつとんだ思考で生きていかなければいけないと思って、衝動的に書きかけの小説を破棄してしまったのだ。

正直、今まで書いていた小説は、私じゃなくても誰でもかけそうな内容だし、私じゃないといけない、ということはなく、私にしか書けないもの、という類のものではないという感覚は以前からあった。自分の気持ちに濁りがあれば、それが作品に如実に現れる。

だけど、新作のネタなんて、いまのところ何一つでてこない。しようもない考えばかり頭に浮かんでくるのだけど、そのどれもが、ありふれた、どこかで見たようなものばかりで、真新しさ、新鮮味にはどうしても欠ける。

私にしか発揮できない色、そんなものあるのだろうか。

とりあえず、抵抗してみる。図書館でうんうん唸って、苦しんで、悩んで捻り出そうとすれば、出産のように、その果てに、すばーんと素敵なアイデアが浮かんでくるかも知れない。

なんとという淡い期待をしながら、私は真っ白なノートとにらめっこをしている。

もう図書館に来てから五時間は経っただろう。考えても考えても、浮かんでくるのは私を否定する言葉だけだ。今のままではダメだ。書いている時は面白い、これはイケる、と思うのだけど、時間が経

つに連れて、一体誰がこんなものを読みたいとお金を出して買ってくれるのだろうかと考え込んでしまうのだ。うーん、作家に向いてないぞ、私。

とりあえず気分転換に、一度席を立って館内をゆっくりと歩いてみることにした。

相変わらず子供達の多いこと。真面目に夏休みの宿題に取り組んでいる女の子。隣の友達とひそひそ話をしている子、完全にやる気をなくしてシャープペンをくるくる回してる男の子、漫画を読みだしている子もいる。自由な空間が広がっている。

外に目を向けてみると、結構楽しいものであるなあ、と今更ながら気づく。私は、どんなに頑張って背伸びをしても、私にしかねないのである。精々3センチくらい背が高くなったところで別にいことない。

ヒントはいろんなところに転がっている。なんだか、ふとそんな気がした。私が日常を飛び出して、やってきたこの場所。

本当は上京するはずだったのだけど。まあこれも運命なのかもしれない。浅田さんを筆頭に、色々と出会いもあった。それがいいものなのか、よろしくないものなのかもよくわからないけど、出会いはないよりあったほうがいい。

ぶつぶつと考え事をしながら歩いていたら、いつの間にか入口前のロビーに出してしまった。掲示物を色々と貼り付けているボードに自然と目が向く。新刊の案内、館内の催し物の案内、地域行事のお知らせの張り紙等がところせましと貼られている。

なんとはなしに舐めるように読む。その中のひとつ、何か他の掲示物とは毛色の違うポスターを見つける。

四国共同出版主催、瀬戸の花嫁文学賞募集のお知らせ

この文学賞の存在は今の今まで知らなかった。けど、主催している出版社には聞き覚えがある。

父さんが勤めている出版社だ。

私の父親は、四国で一番大きな出版社で働いており、そこで編集

に携わる仕事をしている。それ以上の詳しいことは知らない。父さんは仕事が忙しく、家に帰ってくる頃には私は寝ているか、たまに早く帰ってきてても疲れた顔をしている父さんに構ってもらおうという気は子供心にも起きなかった。交わす言葉も少なく、自然と疎遠になっていった。家を出てくる時も、母さんには相談したけれど、父さんにはほとんど直接何も言わず、家出同然のような感じで最後は別れてしまった。なので、ちょっと気まずい。

母さんと私は、いかにも友達親子、といった感じでいろいろと相談できて、しかも母は温和な性格なので、何かと助けられてきたのだが、父さんは、家に居る時からもう常に仕事モード、といった感じで非常に厳しい表情をしている。あまり話すのが得意じゃないのもあって、性別が違うから、何を話していいのかわからない、というのもあったのかも知れないけど、とにかくまあ父さんとは馬が合わない。

私が小説家を目指すきっかけになった名もない小説家の本の話をしてみたいと思ったことも何度かあったけど、結局話せず終いだっただ。母さんにも、なんであんな型物な人と結婚することになったのか、と聞いたこともあるが「父さんはお母さんのことを一番認めてくれる素敵な人なのよ」と言うだけで、私にはあまりその意味がよくわからなかった。

母さんが言うには、私はどちらかというとお父さんに性格が似ている、というのだ。頑固なところとか。まあ、そこは否定できない。

応募してみよう。そう思った。

本当は、締め切りが三か月後に迫った、とある大手出版社の小説賞に応募する予定だった。もちろん多数の応募作品が集まる賞で、それだけ狭き門な賞なのだが、腕試しで応募しようと、作品を温めていたのだけど、どこか現実味のない感じで、雲を掴みに行くようなものだったのだけれど、地元の公募する賞というだけで、なんだか手近に感じるができるようになった感じがする。そんな甘いものでもないのだけど。

それに、父親へのリベンジ、というかなんとかして見返してやりたいという気持ちもあった。これだ、これしかない。なんとなくそんな気がして私は密かに燃えていた。

子供たちがうるさいので、それからすぐに家に帰った。主が帰ってきたからといって取り立てて活気が戻ってきたりすることもない静かな部屋。壁の向こうから、時折聞こえる怒号。浅田さんの咆哮だ。作画がそろそろ佳境に入っているのだろう。私は作業机に座り、ノートパソコンの起動ボタンを押した。暗闇に光がともる。

もっと自分に、素直になろう。そう思った。

この荘に住んでいる皆が、自分の思いに正直で裏がない。まっすぐで、だからか時々つらくなる。私も、本当の意味でこの荘の住人になりたい。自分の心にまっすぐ、進んでいきたい。強く、強くそう思った。

迷いは、心のどこかにいつももある。逃げたい気持ちは、大きな黒い靄になって私を覆い尽くす機会を伺っている。

今までの私を責めることはしない。それも私だ。でも、もっと強くなりしたいし、ならないといけないし、今まで見れなかった景色を見てみたい。今の自分を、思いつき小説にぶつけてやろう。

ブルルルルッ。

携帯が震える。ここ最近めっきり鳴らなくなった携帯。こっちに来てすぐの頃は、愛媛にいた頃の友達からちよくちよく連絡がきていたけど、私が大学を休学して、香川で一人暮らしをしていることを聞くと、皆、私に気が触れたとも思ったのか、めっきり連絡がこなくなった。仕方がないことなのかも知れないけど、やっぱり寂しかった。

そんな携帯が震えている。誰から？浅田さんだ。残念な気持ちになる。

「おい、俺だ。ミッチー、今家いるか？来てくれ！二人の合作！完成したぞ！」

おお、遂に完成か。ということは、さっきの咆哮は完成の喜びだったのか。とりあえず早々に電話を切り、すぐに隣の部屋に行くことにした。

浅田さんの部屋で完成した原稿を見せてもらう。凄い、私の思い描いた話に命が吹き込まれて、自由に動いている。大袈裟でなくそう思った。

「すごいですよ浅田さん！しかも面白い！」
心から出た言葉だった。

「だろ。しつかし女子高生の格好をした男子高生の大軍を描くシーンは大変だったぜ。まったく原作だからって簡単に無理難題を言ってくれるぜ。まあ、お陰ですげえ作品ができたぜ。俺の絵と若い感性の融合、ってやつか。はっはっは」

本当に、この漫画だったら、下手すると賞を取ってしまうかも知れない。今の子供にも十分にわかりやすく、それでいて丁寧に、しかし迫力のある画で飽きさせない。こんな得体の知れないおっさんがこの漫画を描いていると知ったら子供は泣くかもしれない。

「なんだか、悔しくて泣けてくる。」

「おい、なにぼーっと突っ立ってんだよ！そんなに俺のマンガに感動したか？」

「冗談めかして言っているのだろうけど、実際否定できない。」

今すぐ、実家に帰ってしまおうか。私は、何ももたない、ただの身の程知らずの女子大生だ。文才がある訳でもない。浅田さんは、ずっとずっと、芽がでていない頃から、まあ今も出ていないのだけれど、漫画家を目指して、全くぶれずにここまでやってきたのだ、ということが原稿から伝わってくる。一朝一夕の努力ではない、自分を持って進んできた過程があつて、この原稿が生まれている。

私は、本当に小説家になりたいのだろうか。

父親へのちょっとした反抗心。本が好きだったから、小説家にもなれたらいいなあ、くらいのほんの憧れに過ぎない想い。なんて

浅はかなのдарう。

「ど、どしたんだ。おい、ミッチー」

「浅田さん。私、もうダメです」

自分でも驚くくらい暗く、低い声だった。

「お？」

浅田さんは狸に化かされたようにきよんとしている。

「私、小説家になんて、なれない」

抑え込んでいた感情が溢れそうになって決壊寸前だった。

「なれないよ。私、才能ないし、人がお金払って読んでくれるような本なんて書けないよ。無理だよ。できっこないよ」

あーあ、決壊しちゃった。心の中で、嘆く。

「そもそも本当になりたいのかどうかも分からないよ。夢人荘に来てから会う人会う人皆まっすぐに自分のやりたいことに向かって世間体も将来性とか、なんも考えてないもん。うらやましいし、私もあなりたたって思ったけど、心のどこかでは、私もいつまでも馬鹿なこととしてられないとか、普通に就職するべきなんだろうな、とか、才能もないのに夢ばっか語ってられないだろとか。別に誰からも必要とされてる訳じゃないし、彼氏からも愛想つかされてこっちきてから全然連絡なくなっちゃったし、けど私もなんか意地張っちゃって連絡できないし。昨日まで書いてた作品もなんかよく見るとありきたりでつまらない気がしてバックアップもとってないのに削除しちゃったし、作品ひとつ書き上げることができないのに、小説家なんて夢のまた夢なんです。だから」

「ミッチー！」

ダムからあふれ出す水のように心に溜め込んでいた言葉がそのままなんのフィルターも通さずに発せられていた。それを、浅田さんの私の名前を呼ぶ一言が無理やりせき止める。

「こんなもんなあ。やりたいと思ったもん勝ちなんだよ」

浅田さんは私が手に持っていた原稿をそっと、優しく取り返した。「この原稿もな、まあ自分でもいい出来だとは思うが、今では単な

る紙切れだ。なんの価値がある訳でもない」

浅田さんは自分の足跡をたどる様に、1ページ目から原稿をパラパラとめくる。愛しい我が子を見守る父親のような優しい目で。

「俺もな、たしかに30前になってまで、なんで俺はこんなことしてるんだろうって思う時もあるよ。アパートや食費は大家さんにだいぶ助けてもらっているけど、それでもバイトしないと食っていけないし。もしどっかの企業に就職してたらもっと楽な暮らしだったんだろうなって思ったこともあったよ。」

でもな、俺、単純に楽しいんだよな。マンガ描いてるとき。マンガ読むのも好きだったし、俺もいつかマンガ家になって子供の頃の俺みたいに、またガキが夢中で読みたくなるようなものが作りてえな、って。そんな単純な理由だったさ。そりゃあ何年も芽がでなくて、苦しいけどさ。苦勞して、苦勞して、やっとマンガが描きあがったとき、最高に幸せなんだよ、俺。だから、もう本当にダメになる時まで、俺は書き続けようって思うんだ」

こんなもんな、なりたいてって思ったもん勝ちなんだよ。

浅田さんの声が、やけにすんなりと頭の中に入ってくる。そうか、今の私の頭の中はからっぽだから、こんなにもすつと、中に入ってくるのだ、と分かる。ついさつき、私が大事に大事に抱えていたもやもやは、全て吐き出してしまったから。

「本当にやりたいことがあるヤツなんて、きつとそんなにいねえんだよ。だから、俺も、ミッチーもラッキーだぜ。一生かけて追いかけられる好きなことがあるんだからよ」

なんか、浅田さんが凄い人に思えてくるから不思議だ。それに、とてもすつきりした。頭の中のモヤモヤがとれた思いだった。

「なんか、ありがとうございます。励ましてもらっちゃって」

笑顔が素敵でないのは、何度も鏡で見なれた顔だから判っているけど、無理やり笑ってみた。

「なんだその気持ち悪い笑顔は」

失礼な。でも、まあ気を遣われないほうが気楽でいい。

「浅田さん。私、しばらく部屋に籠りますんで。応募したい賞の締切まであと一ヶ月しかないんです」

急に自分の目が欄々としている気がした。もう目的を見失わなくて済みそうだ。

「そうか、新作か。まあ頑張れ。仲間として応援してるぜ」
仲間。笑。

「私、この夢人荘を舞台にした小説を書こうと思います」
おお、なんか勢いで言ってしまった。

「お！そいつは面白そうだな。もちろん俺が主人公だろ」
浅田さんは腕組みをしながら喜々としている。

「それはありえないです」
とりあえず完全否定する。

「ぐっ。言うようになったな、ミッチー。ま、この夢人荘が有名になれば大家さんにも恩返しが出来るってもんよ。生憎ネタには困らんしな。いいんじゃないのか」

とりあえず隣人のオツケーもでた。まあ、それなりの脚色は加えるし、問題ないだろう。それより今は、この熱い気持ちが冷めないうちに書き始めるのが先決だ。

「じゃあ、さっそくお邪魔しました」

なんか変な日本語になってしまったけど、そんなことお構いなしに私は浅田さんの部屋を後にする。

そうそう、一つ言い忘れていた。靴を履いた後、ドアを開ける前に振り返った。

「もし、浅田さんがマンガ賞とつたら、賞金は折半ですよ」
ま、まじかよ、と浅田さんが言い終わるか終らないかのうちに、私はドアを閉めていた。

家に帰るや否や、私はパソコン机に直行する。パソコンの起動ボタンを押す。デスクトップ画面になるまでのわずかな時間すらもどかしい。早く、早く。せかしてもどうしようもないことは分かっている。早く、早く。せかしてもどうしようもないことは分かっている。早く、早く。せかしてもどうしようもないことは分かっている。

やっとデスクトップ画面へと切り替わる。昨日まで書いていた小説はもうゴミ箱のなかに捨ててしまった。またイチから始めなければいけないにもう完成間近のような気持ちになっている。ワードのアイコンをクリックする。まだ何も命を吹き込まれていないまっしろな画面。今からこれに私は命を吹き込まなくてはならない。

これは、私の成功物語だ。

最初の一行が、まるで最初から決められていたかのように自然と浮かんできた。こんなもの、言ってしまったもの勝ちだ。途方もない夢なら、信じることから始めよう。今なら心からそう思える。やはり。楽しくなってきた。

登場人物の描写には全く困らなかった。大まかなストーリーは、夢を追いかける若者に破格の安さで部屋を貸してくれるあるアパートが舞台だ。もちろんこの夢人荘のことだ。

しかし、長年若者達を応援してきた夢人荘だが、元々採算を度外視した家賃繰りをしていたこともあり、とうとうアパート経営が不可能になってしまふ。お世話になった大家さんに恩返しをするため、大好きな夢人荘を存続させるため、住人達それぞれが自分の目標としているもので賞金を稼いで助けようとする物語だ。

ご都合主義と言ってしまうとその通りなのだが、それぞれが大なり小なり賞金を手にして、大家さんを救う、という話に落ち着く。その後、火事場の馬鹿力を発揮し賞を手にした夢人荘のメンバーは、皆それぞれの活躍の場へと歩みを進めていく。そして、なんとか経営を続けることができる状態にまでなった夢人荘には、新たに夢を追いかける若人が集いだす、というものだ。

設定はベタなものかも知れないが、私はこの話を、誰よりも愛して、誰よりも深く、心を込めて書くことができる。絶対に良いものになる。そんな気がビンビンしていた。

私の引き籠りは何日も続いた。普段なら、気分転換も兼ねて一日のうち必ずどこかでは外の空気を吸いに出掛けていたのだけど、今

はそんな時間さえも惜しい。噂を聞きつけた寺河さんが毎晩のように食事を差し入れに来てくれたり、祥子ちゃんがバイト先からもらってきたバナナを差し入れしてくれたり、ずっと籠っていて退屈だろうということでもンちゃんとの猿回し芸を披露してくれたりした。モンちゃんはたいそう賢いサルなので、どちらかというと言子ちゃんのほうが回されているような感じがした。こんな二人が日光江戸村で活躍する日がいつかやってくるのだろうかと思うと思わず笑ってしまう。

なんと滅多に外出しないらしいことで有名な浅田さんまで、眠気ざましにいいというコーヒー豆を、なんとコーヒーメーカーとセツトで差し入れしてくれた。ブラックで飲むのが一番目が覚めるらしいが、私はコーヒーはミルクと砂糖をふんだんに入れないと飲めないお子様なので、そうなってしまうと効果の程は怪しくなってしまうが、もらえるものはありがたくもらっておくことにした。引き籠り生活の余波で、私の人相がかなりよろしくないものになっているらしく、浅田さんは大分引いていた。まあ、あまり根詰めすぎてもよくないと思うぞ、と言って早々と去って行った。

珍しいお客さんとしては、ケントもやってきた。何を勘違いしているのか知らないが、結婚祝いかと言いたくなるような大きな花束を持って現れた。まだ何も受賞してないぞ。ケントは目のクマがアイライナーでひいてるのかとおもってくらいくつきりだ。ずっと家にいるのに眠れないなんて難儀な商売だねえ、あつはつは、と言って帰って行った。部屋の隅に夢人荘の外観が描かれた絵が一枚置いてあった。優しいタッチでデフォルメされた、ボロっちいけどどこか安心する、そんな絵だ。もしこれが書籍化されるなら、装丁はこの絵で決まりだなと思った。

小説が完成したのは、引き籠り開始から丁度一ヶ月が過ぎた頃だった。最低限の買い出し以外は全く外に出なかった。本当に小説を書くだけの日々だった。我ながらよく発狂しなかったと思う。はは、なんとか締切に間に合った。急いでさんざんチェックした魂の原稿

を印刷し、最終の最終チェックを行い、封筒に詰める。郵便局が閉まるまでにはまだ時間的に余裕があったので、本当に久しぶりに化粧をして、外の世界に出ていく準備を入念に行った。寝不足で目の下のクマや、いつの間にか現れたふきでものやらをコンシーラーを塗りたくってなんとか隠す。クマはなんとか隠せても、全身から滲み出ている疲労感はどうしようもない。とりあえず無事投函するまでは気を抜けまい。

外に出る。久しぶりの外の空気。単純に気持ちいい。

「あー、生き返るわ」

おもいつき深呼吸する。新鮮な空気が体内に満たされると、なんだか心も満たされるような気持ちになる。

さ、行くぞ。私はとことこと歩きだした。

今、私の右腕には、私が魂を込めて書き上げた原稿が入っている。これは世間的には何の価値もないものだけれど、私にとっては、自分の分身といってもいいくらいに大事な存在だ。きつと、私が初めて香川に来た日の、浅田さんも同じ気持ちだったのだろう。自分が誠心誠意を込めて書き上げた原稿を見ず知らずの女の尻に敷かれてしわくちやにされたらどれだけ憤るか、今になってやっと分かる。ただ、あれはわざとじゃないのだ。

自分が頑張つて書いた、というよりは周りの人達に書かせてもらった小説、といった感じだ。皆がいなければ、この作品は絶対に生まれてはいない。私一人の力では、絶対に生まれなかった小説。出来れば、皆のためにも、何かの形で結果が出てくれればいいなと思う。

誰に原稿を足蹴にされるでもなく、無事に投函することが出来た。後は結果を待つのみだ。

原稿を預けた瞬間、なんだか、ずーん、と疲れがきた。今までこつこつ並べてきたドミノがじゃーっ、と崩れていったような感じ。疲労感、とちよっとの達成感とで、なんかよくわからないけど、まあ満たされているような気がする。

家に帰って、ぐっすり寝よう。そしたらこの目のクマも、少しは治まってくれるだろう。私はとぼとぼと家路に着いた。

そして部屋のドアを開けたら、クラッカーが鳴った。

「おつかれー！」

「小説、完成おめでとー！」

私はクラッカーから発射されたなにやらきらびやかなキラキラとしたものを頭から思いつきりかぶった。眼前に広がるのは確かに私の部屋なはずなのだけど、そこにいるのはいつものメンバーだ。

浅田さん、寺河さん、祥子ちゃん、モンちゃん、ケント。狭い部屋にこれだけ人がいると、賑やかで、せわしない。

「びつくりした？ゴメンなさいね、勝手に合鍵で入っちゃった」

寺河さんはあまり悪びれたふうでもなく笑顔で私にそう言った。

「俺がコンビニから部屋に帰ってるとき、たまたまミッチーを見かけてな。でつかい封筒抱えてたし、なんかやりきった顔してたから、ああ、これは今日投稿に行くんだな、ってピーンと来たわけよ」

浅田さんは何故か得意気だ。

「ミッチーさん、お疲れ様です。私、寺河さんと二人で鍋作ったんですよ。最近すっかり寒くなってきたしいいかなと思って。あ、あとでバナナケーキも作ってあるんで皆で食べましょう」

祥子ちゃんがその愛くるしい丸顔をさらに丸々とさせている。

「俺は特に何を持ってきた訳でもないけど、鍋をするって聞いてね。お邪魔したのさ」

ケントがその長い前髪を？きあげながらそう告げる。前髪を切ればいいと思う。

「まあまあ、とにかく皆でみっちゃんの小説完成おつかれ会をしたかったの。ここ一ヶ月、本当に精魂つめてたみたいだから。何かできないかな、とと思ってこの機会を伺ってたのよ」

寺河さんが代表して、皆がここに集まっている経緯を説明してくれた。何人かはただこはんにありつきたかっただけのようだがするけど。

なんだか家族みたいだな、と感じた。

あつたかい気持ちになれる。私はここに来てよかったな、って思う。

「さ、皆席について、食べましょ食べましょ。さ、祥子ちゃん食器の準備お願いね。あ、みつちゃんごめんね勝手に炊飯器使わせてもらってるから。早炊きにしたからもうすぐ炊けるわよ。さあさあ、皆席に着いて」

寺河さんが先導して皆に指示を送る。本当にお母さんみたいだ。世話を焼くのが好きなのだろう。人柄も良いし、付き合っている人はいないのだろうか、ちよつと気になる。思わずケントの顔をちよつと見てしまう。

ただ、そんな世話焼きの寺河さんの周りは奇人変人だらけになってしまっているのが悲しいところだ。せめて私くらいは、もつとましな人でいてあげたい。

皆でわいわい言いながら鍋をつつきあい、祥子ちゃんのバイト先のバナナをふんだんに使った食後のバナナケーキも堪能した。本当に美味しかったし、嬉しかった。それ以外の表現が出てこなかった。ただ私みたいなズブの素人が自作の小説を書き上げただけで、なんでこんなに人が集まってお祝いしてくれるのだろうか。私の個人的なことがまるで皆の共通目標のようになってるのは、なんだか不思議な気持ちだった。

「あの、なんで、皆さん、集まってくれますか？」

しまった。心の中で思っていたことが無意識のうちに口をついて出てしまっている。

瞬間、静寂する場。誰も口を開かない。言いだしつぺな手前、私が続けて口を開くしかなさそうだ。

「いや、全然、本当に嬉しいんですけど。私の全然個人的な事なのに、こんなに皆が応援してくれてたなんて知らなくて、そこまでしてもらっていいのかな、って。私誰にも何もしてないし。お世話になっただけで、いいのかなって」

あつという間にお通夜のように静かになってしまった。言うんじやなかった、と途端に後悔した。

「湿っぽいこと言ってるじゃねーぞ、ミッチー！お前はもう、立派に夢人荘の仲間だぞ」

浅田さんが顔にクリームが付いたまま素敵なことを言っている。

「考えてもみる。こんな不景気にな。安定を求めて、皆が皆やれ公務員だの、大企業に就職しないとだの、そんなやつばかりの世の中だぞ。このままじゃ日本は面白いこと考えるやつがどんどんいなくなつてつまんねえ国になるぞ。まあ、安定を求める気持ちもわかるっちゃわかるけどよ。それでも、小説を書こうとしてるミッチーはな。もうどうしようもないくらい俺ら側の人間だよ。そんな大事な仲間が、精魂込めて原稿を書き上げたのを祝わないなんてお前、そんな、なあおい！」

もしかしてお酒を飲んでるのかも知れないくらい浅田さんは饒舌で情熱的だ。でも本当に本音で喋ってくれているのが伝わってきて感動した。

「みっちゃん。みっちゃんが書いた小説が本になったらなんて、考えただけでもわくわくするわ。そんな気持ちにさせてくれるだけで、みっちゃんは十分私達を幸せな気分らせてしてくれているのよ。だから何もしてないなんてことはないのよ」

寺河さんは本当に、人間に必ずあるはずの悪意とか毒気とかそういうったものが全く感じられない。天使というのは本当にいるのだ、と今なら心から思える。

「私には、夢っていう程のものがある訳じゃないのに、夢人荘に住まわせてもらって、本当にいいのかな、って感じだったんですけど、ミッチーさんは、私とそんなに歳も違わないのに、すごく自分のやりたいことが明確で、凄いなって思います。かつこいいです！」

祥子ちゃんはまるでやり手の憧れ先輩 L を見るような眼で私を見ている。私はそんな明確なビジョンを持った立派な人間なんかじゃないのよ、と血眼で祥子ちゃんの顔面をしかと掴んで言っただけ

たいが、生憎そんなことができそうな空気でもない。ただのいじつぱりでこんなところまで来てしまっただけなの。ああ、自己嫌悪に陥りそうになる。

「読みたいな。ミッチーの書いた小説」

パーティーが始まってからさつきまでずっとにやにやと笑みを浮かべていたケントが日本語を思い出したかのように口を開いた

「あ、俺も読みたいな。ゲラみたいなのないのか？」

「私も読みたいです！」

思いつきりこの夢人荘を舞台にした小説なので、この場で皆に読まれるのはかなり気恥ずかしい。できるなら私のいないところで読んで欲しい。

「あー、原稿のコピーはないですけど、データならパソコンの中に……」

「じゃあ、俺メモリースティック取ってくるから、そのデータを移したら、俺が責任持って全員分印刷しとくぜ。やっぱ小説は紙に印刷して読まねえとな。味だな。味」

浅田さんはそう言い終わるや否や小走りで自分の部屋に戻って行って、そして速効で帰ってきた。さすがに隣の部屋だから、早い。

浅田さんは勝手知ったる様子で私のパソコンを起動させ、デスクトップ画面にある完成稿のアイコンをクリックし、さささっとコピーをする。

「じゃあ、近いうちに印刷して回すから。楽しみにしといてくれよ。俺は一足先に読ましてもらうぜ。なんてったって俺とミッチーは原作と作画の関係だからな」

そんな感じで浅田さんはそそくさと去って行った。

「なんか、本人より嬉しそうでしたね」

祥子ちゃんが呟く。

「ああ見えて優しいのよ、浅田さん。伝わりにくいだけで。誰よりもみっちゃんのこと応援してるのよ」

寺河さんが優しく微笑む。私は結構浅田さんのことを面白可笑し

く書いてしまっているので、本人からクレームがこないかどうか心配だ。

一番のにぎやかさが去ったこともあって、その場はここでお開きになった。静かになった部屋。いつもの光景なのに、なにか違和感があるように感じるのは贅沢だろうか。

あんなに、喜んでくれてるなんて。なんか、私、幸せなんだなと素直に思う。

何を成し遂げた訳でもないけど、心は満たされていた。私の目的はある意味達成されたのかもしれない。

明日から何をしよう。とりあえず何か新作のネタを考えようか。応募作の発表まではまだ二ヶ月もある。長いような短いような時間を、ただ時の流れるままにゆっくりと過ごして、この身体いっぱい時間を感じて生きていこう。そう思った。

結局のところ、私はそれからの二ヶ月を、まるで夫に先立たれ、一人細々と暮らす老婆のように、静かに静かに過ごした。

小説を書くこと、一日の端々で思い立つのだけれど、なんとなく今どんなものを書くこととしても、「夢人荘の人々」を上回るような小説は生まれぬような気がして、日記のようなものをぼつぼつと書いては時間を浪費する、人間的には失格の烙印を押されても文句の言えない生活を送っていた。

あまりにやることがないので、バイトでもしようかと思ったが、いつまでここに居るかも決めていないので、あまり長期のバイトはできないし、だけでも生活費は段々となくなっていくし、通帳残高もポディーブローのようにじりじりと、確実にダメージを受けている。このままではいつまで立っていられるか検討もつかない。

そんな折に、祥子ちゃんにばったり会った。モンちゃんも一緒だ。最早なんの違和感もない。最近は暇を持て余しているので、大家さんである寺河さんのお手伝いなんかをさしてもらっている。庭掃除はすでに私の日課として定着している。いろいろな人々が行き交う

街の様子を、レレレのおじさんのように俯瞰している日々。悪くはないけど、別段よくもない。

「あ、おかえり〜」

大家でもないのに我が家ぶっておかえりなどと言ってしまふ私。祥子ちゃんはバイトの帰りのようだ。

「お疲れさまです。毎日お掃除、偉いですね」

その年で一人暮らしをして、毎日のように健気に八百屋で働いている祥子ちゃんには叶わないので、そんなことないよ、というやりわりとした否定を意味した微妙な笑顔で返す。

「そうだ、祥子ちゃん、八百屋さんでバイトなんか募集してないかな？私も、流石にちょこつとは働かないとなくなんて思ってる」

と私はそれとなくバイトの件について伺ってみる。知り合いの紹介だと採用してもらえる確率はかなり高いし、一からバイト先を探す手間も省ける。

「バイトですか？モンちゃん効果で八百屋さんもお客さんが増えて、流石に私と店長とおかみさんだけじゃ厳しくなってるので、募集しようか、って丁度話してたところなんですよ。店長に聞いてみますね」

と、かなり好感触な返答が返って来た。

そして一週間後、採用があっさり決まり、八百屋の店先で野菜を並べている私。意外にも二十歳にしてアルバイト経験が豊富な私。高校時代から色々バイトしているのだ。ピザ屋、ファミレスのウェイトレス、コンビニ店員、新聞配達、本屋、そば屋で働いたこともある。でもまさかこんなレトロな八百屋さんで働くことになるとは思わなかった。

八百屋の朝は早いらしく、私は朝九時からの出勤だったのだが、店長である山下さん五〇歳は、早朝から野菜のセリに出掛けるため、いつも朝四時には起きています。とてもハードな仕事だ。とても元気のいい人で、活きの良い、正に八百屋の店長さん、といった

風情を感じる。奥さんである茂子さん48歳も、おだやかでも感じのいい人だ。いつも電卓を片手に持っている。資金面の管理は茂子さんが行っているようで、一時期は郊外の大型スーパーに客を取られ、売り上げが大分落ち、店を畳もうかという話にもなったそうだが、祥子ちゃんとモンちゃんがアルバイトとして働きはじめた頃から、売上が徐々に伸び、サルがバナナを売ってくれるお店という口コミも手伝い、遂には地元テレビ局が夕方のニュースで特集をしてくれることにもなつて、今では巷でちよいと有名な八百屋さんとして人気を博している。二人共、本当に良い感じの昭和のご夫婦といった塩梅で、香川のお父さんお母さん、と思ってしまうくらい優しくしてくれた。

二人は祥子ちゃんとモンちゃんに大層感謝しているらしく、二人がきてくれていなかったらとつくに店を畳んでいたという。祥子ちゃん自身は何も気づいてないことだろうけど、こんなにも人に感謝されている祥子ちゃんは凄い人だな、と素直に思う。

そんな祥子ちゃんが紹介してくれたものだから、二人も快く採用してくれたのだろうし、私も祥子ちゃん（とモンちゃん）の顔に泥を塗らないように一生懸命に働こうと決意を固めた。野菜の種類は多岐に渡るので、まずはそれぞれの名称をしつかり覚えて、どんな料理に向いているとかの知識も必要だし、レジ打ちも間違えないように気をつけないと、在庫置き場には大量の野菜が毎日のように納品されてくるので、鮮度が大事だから早く売り場に出さないと、とかでいろいろ大変だった。祥子ちゃん、偉いな、とまたしても思う。

八百屋での仕事を初めて一月が過ぎ、筋肉痛との戦いにもようやく慣れてきた頃。今日は休みだ仕事もない、と一人鼻歌交じりに部屋でぐうたらしていたら、ドンドンドンドンとけたたましくドアをノックする音が部屋に響いて驚く。煩わしい音の正体は大体見当がつく。

私はつかつかとドアに足を運び、面倒臭そうにドアを開ける。予

想通り、ドアの向こうのノックの正体は隣に住む浅田さんだ。顔には満面の笑みが浮かんでいる。急いで来たのか、若干汗をかいていて、顔がてかてかしてちょっと気分を害する。

「やったぞ、ミッチー！」

「何がです？」

浅田さんは私の問いかけを全く無視して何を思ったか私に抱きついてきた。あまりの突然の出来事に身動きができなかった。警察、通報、という言葉が頭をよぎる。

アメリカ人ばりのハグの後、何を血迷ったかキスを迫ろうとしてきたので、そこは流石にビンタで応対した。しかし浅田さんは笑顔を全く崩さない。

「やったぞ！俺とミッチーの合作！優秀賞だ！受賞だ！やっほい！」

「え？本当ですか？すごい！やりましたね！」

「ミッチーのお陰だ！ありがとう！」

と言いながら再び抱きつこうとしてきたのでポディーへのミドルキックで応戦する。昨日K 1をテレビで見ていてよかった。見よう見まねだが大分ダメージを与えられた模様だ。

「ぐっ、す、すまん。はしやぎすぎた。まあ、とにかく、そういうことだ。週末の土曜日に東京で授賞式があるから、一緒に来てくれよな。原作でしっかりミッチーの名前も入ってるんだから、来てくれないと困るぞ。じゃあ、俺は授賞式で着てくるスーツ選びに言ってくるから、またな！あっ、そうそう。賞金の一〇〇万は半々で山分けにするから。じゃあなー」

と矢継ぎ早に浅田さんは言葉を発したかと思うと、あっという間に去って行った。もっとちゃんと祝福の言葉を述べたかったが、ビンタとミドルキックという手荒い祝福のみに終わってしまった。すごいな、浅田さん。本当にマンガ家になっっちゃったんだなあ。

人が夢を叶えた瞬間というものを目の当たりにしてしまうと、嬉しいような、なんだか

自分が取り残されたようで少しさみしいような、不思議な感覚だった

た。

ちよつと外の空気にあたろうかと思い、私は外行きの服に着替え、部屋を飛び出した。

「よっ」

ドアから出た瞬間に呼び止められる。声のする方向を見やる。私の位置から、左下。ケントが座っている。いつから居たんだこの人
「実にいいビンタとキックだったな」

その台詞で、その辺りでもういたんだな、ということには分かった。
「あれは不可抗力です」

「確かに、通報されなかつただけでしたな」

ケントは自分で言ったセリフが自分でツボだったのかケラケラと笑う。

「はっは。浅田は近いうちにここを出るかも知れないな。そうなたら、大分この夢人荘も静かになりそうだ」

ケントの顔には幾許かの寂寥が混じっているように見えた。

「ミッチー。俺さ、ニューヨークで個展を開くことになってさ。来週には向こうに行くことになった」

「へ？」

ケントは、さらつと凄いを言った、気がする。あんまりさらつというものだから、事の凄さがいまいち理解できない。

「そんな訳で。じゃあな。ミッチーも、いつかはニューヨークに遊びに来いよ」

「え、あの、ちよつと……………」

そんな簡単に遊びにいけるようなところじゃないでしょって言ううと思つたけど、ケントはすくつと立ち上がったかと思うと、何の未練もなくすーつと消えるように去ってしまった。

しばらく呆然と立ち尽くす私。

あんまりばおーつとしていたら、少し冷えて来た。もう冬が迫っている。そろそろ部屋にもどろろつと思つた矢先、階段の向こうから、駆け足でこちらに向かつてくる人影が見えた。祥子ちゃんだった。

「あ、はあはあ、ミッチー、さん。帰って、くる、時にちらつと、ミッチーさんがいるのが、見えたんで、走ってきたん、です。はあ、はあ、き、聞いてもらいたいことがあって」

祥子ちゃんは走ってきたからか、ずいぶんと高揚した様子だった。

「モンちゃんが、今日、日光江戸村にスカウトされたんです！」
？

「ど、どういうこと？」

祥子ちゃんは喜々としているが、私はいま一つ何が起こったのか理解ができない。

「日光江戸村ってあるじゃないですか？あそこの編成部という、まあ全国から日光江戸村で働ける人材を探し出してスカウトするっていう部署があるらしいんですけど、その人が、たまたま地元のテレビ局に特集された映像を見たらしくて、是非うちに来て一緒に働いてほしい、って言われて」

「そ、それは凄い話だね」

確かに、あんな人間顔負けの動きをする知能の発達したサルであれば、そんなオファーがきてもおかしくない。

「返事はもう少し先でもいい、って言ってくださったんですけど、こんなチャンスなんか滅多にないし、日光江戸村で働けることになったら、きつと両親も認めてくれると思うので、お受けしようと思っんです」

そんな話、今を逃せばそうそうあるものでもないだろうし、もし私が祥子ちゃんの立場なら、二つ返事でOKすることだろう。

「そ、そうなんだ。よかったね、祥子ちゃん」

「ええ。でも、お受けするなら、ここを出ていかなければいけないので、それはちょっと迷っているんです。大家さんにもお世話になりましたし、バイト先のお二人にもご迷惑を掛けてしまうことになるし」

ついさっきまでの笑顔が一変し、俯きかげんになる祥子ちゃん。

「いや、でもこんなチャンス、逃すなんてもつたいないよ。八百八

は、今なら私もいるし、祥子ちゃんも、モンちゃんも、もっと大きな舞台上で活躍できるはずだよ」

「ミッチーさん……………」

「だから、チャンスは逃しちゃ駄目だよ」

「ありがとうございます」

「うん」

祥子ちゃんはぺこりと一礼をして、自分の部屋へと帰って行った。

私は、一人残されてしまうのだろうか。浅田さん、ケント、祥子ちゃん、いつかはそんな日が来るのかも、と漠然と思っていたけれど、こんなに立て続けに皆がいなくなるなんて、なんだか悲しくなってきた。

皆、着実に自分の夢へ向かってステップアップしている。私なんか、最近、やっとこさ一作の小説を書き上げたくらいのものだ。私は、ただの凡人だということ突き付けられたような気がしてなんともやるせない気持ちになる。もう、愛媛に帰ってしまおうか。そんな考えが脳裏をよぎる。それはとても大きな波になって私の脳内でよせては返す。ああ、憂鬱。今日も私は狭い部屋の隅っこで一人悶々としている。もうダメだ、という声が自分の頭の中で日増しに大きくなる。聞きたくない、聞きたくない。でも、もう私の中ではほとんど答えは出てきてしまっている。もう、これ以上ここにいる理由はない。そんな気がしていた。

せつかく祥子ちゃんにバイトを紹介してもらってまだわずかしか経っていないのに申し訳ないが、愛媛に帰るとなれば、バイトも辞めるしかない。言いだしにくいけれど、ここにこれ以上いても仕方ない、という気持ちには勝てそうにもない。

私が実家に帰ることを、両親はどう思うだろうか。母親は、まだ理解してくれると思う。

こっちに来てからも何度か連絡を取ることがあったし、いつでも帰ってきていいから、と念を押すように、電話を切る直前にはいつも

言われていたし、やっぱりね、と思うくらいでそれほど気にも留めずに接してくれるだろうけど、父親の方は、どうだろう。あれ程反対されたのに振り切って、こんなところまで来て、ほんの半年足らずで帰ってくるなんて、呆れられて、親子の縁を切られてしまうかもしれない。

この狭い空間が、私の世界の全てで、イコールそれは私という人間の力量である気がした。何も出来ない。何も生み出せない。私がこの世界に生まれた理由なんて、何もないのだろう。かといって、何かをしてやろうという気持ちにもなれない。このまま小さくなって、消えてしまいたい。そんなことしか頭に浮かばない。駄目だ。

「おーい！」

幻聴だろうか。男の声が聞こえる。遠い昔、どこかで聞いたような声。どこでだった。

「美智！」

ドンドンドン。

私の名前を呼んでいる。

「おーい、開けてくれ！」

私はその声に促されるように声のする方へふらふらと歩いて行く。そしてドンドンとけたたましく鳴るドアのカギを開け、ドアノブを回す。

「あっ、美智！」

ドアの向こうに現れたのは、智久だった。そうだ、この顔は見覚えがある。私の彼氏だ。

「あ、ひ、さしぶり」

そんな言葉しか出てこない。

「半年、ぶりだね、元気してた？」

「う、うん。まあ」

あまりに久しぶりで、うまく言葉が出てこない。私は、智久とどのように接して来たのか。どんな話で盛り上がったのか。全然思い出せない自分に焦る。

「あ、ごめんね。連絡もなく、いきなり訪ねてきて」

智久は少し罰の悪そうな顔をして、私に謝る。

「いや、全然、私も、半年も全然連絡してなくて、なんか、ごめん」
智久はいいや、と首を横に軽く振った。

「それはオレだって一緒さ。それに、俺もあれから色々考えたよ」
私は久しぶりに現れた来訪者のためにコーヒーを淹れる。智久には炬燵に座ってもらった。なんだかぎこちない。私達は、まだ付き合っていることになっているのだろうか。正直、もうとくに愛想を尽かされて終わったものだと思っていたし、それでも仕方ないと思っていたので、何故今更？という気持ちの方が久しぶりに会えた喜びよりも大きかった。

「美智みたいに、俺も何か見つけなきゃなって。このままじゃ俺、ただなんとなく卒業して、今、就職難だしさ、とりあえず、特に興味がなくとも、そこそこの会社に入ればそれでいいかな、とか、どんどん考え方が流されてることに気づいたんだ。大勢の人が歩いているその道が正しくて、もうその道は大きな流れが出来てるから、乗っかって歩いて行くのはある意味すごく楽なんだけど、自分ってものがそこにはないんじゃないかな、って」

智久は唐突に語り出した。今までの空白の時間を埋めようとしていたみたいだ。

「でも、やっぱり自分がやりたいことって、何かあるはずなんだよな、きつと誰にでも。皆が皆サラリーマンじゃ、やっぱり面白くないよな。うん。それぞれに夢があって、叶うかどうかなんてわからないけど、追いかけて、追いかけてさ。美智みたいだ」

耳が痛い。私はそんな、立派な人間じゃない。

「俺さ、三ヶ月前から、四国共同出版で、インターンシップって知ってる？就職体験、みたいな感じで、やってることは本当雑用なんだけど、色々経験させてもらって。うん、今は凄い充実してるんだ」
四国共同、出版？

「ほら、別に狙ってた訳じゃないんだぜ。本当、偶然なんだよ。美

智が小説家になるって言うてたから、じゃあ俺は編集者になるべきかな？なんて、本当、単純な、それだけの理由なんだよ。で、大学のキャリアセンター行ったら、たまたまその出版社のインターンシップのことを知って、それで」

四国共同出版は、お父さんの勤めている会社だ。そして、私が小説を投稿したのも、その会社の公募賞だ。

「美智のお父さんとも会ったよ。まさか、そんな風にして会うなんて思ってたから。」

確か、お父さんが出版社で働いてるって言うてたから、もしかしたらと思つて勇気を振り絞つて聞いたんだぜ。めっちゃ怖かったよ。仕事人、つて感じで、凄い近寄り辛かったあ」

智久はその当時のことを思い出し、ひきつった顔を見せる。

「お父さん、固い人だけど、良い人だな。俺が仕事をどうしたらいいか分かんなくておろおろしてる時も、そつと近づいてきて助けてくれたり、本当は俺みたいな雑用が出来ないような仕事のことも教えてくれたり、絶対忙しいはずなのに、面倒見が良い人なんだな、つて思つたよ。部下からもすごい慕われてるし。笑顔がないからちよつと怖いけど」

今まで全く知らなかった父の情報が智久を介して入ってくるといふのは、なんだか不思議な感覚だった。一瞬、誰の話をしているのか分らなくなつてしまふ。

「小説賞、応募したんだろ。四国共同出版の」

智久の目がしかくりと私を捉える。

「うん」

「俺、美智のお父さんに連れられて、選考過程の流れを見せて貰つた時、美智の原稿を偶然見つけたんだ。お父さんは、凄い驚いた顔をして、ずつと美智の書いた原稿を見てたよ」

「ほ、本当に？」

「そんな嘘ついてどうするんだよ」

智久は笑顔で答える。しばらく会っていなかったからか、少しだ

け大人になったような気がする。

「あんなに挙動不審になってたお父さんを見たのはあれが最初で最後だったよ」

「なんだか、言葉にならない。」

「で、これが本題なんだけど」

智久はそういえば来たときからずっと提げていた、怪しく黒光りしている手提げカバンからなにやら封筒を取り出した。

「おめでとう。美智」

私は何も意味が分からずぽかーんとしている。

「夢人荘の人々、受賞おめでとう」

瞬間、理由なく涙が溢れてきた。

受賞した。受賞してしまった。本当に、本当なのだろうか。疑いの気持ち捨てきれないまま封筒を破って中身を取り出していく。涙で前がよく見えない。

中には賞状が入っている。「四国共同出版瀬戸の花嫁文学賞最優秀賞」と書いてある。他に、授賞式の日程、書籍化に当たったの注意事項、版權について等々の説明が書かれた書類が色々入っている。「本当は、郵送で送って、後日出版社の担当の人から電話が掛かってくるようになってるんだけど、どうしても自分が渡しに行きたいって無理言つてOKしてもらったんだ」

智久は照れ笑いを浮かべている。

「本当に、本当に、賞取れたんだ。夢じゃ、ないよね」

「本当に本当。現実だよ」

智久は自分のことのように嬉しそうだ。私はもう身体中の水分が眼から出きってしまったのではないかというくらいに泣いている。

「じゃあ、俺はそろそろ帰らないと。今日も実は会社に行かなくちゃいけないんだ。受賞式は二週間後だから、その時にまた。たぶん会場の設置の準備とか、してると思うから、俺も一緒に美智の晴れ舞台を見れるはずだから。じゃ、また」

智久は要件だけ告げると足早に去って行った。きつと仕事を押し
て無理して受賞の知らせをしにきてくれたのだろう。

いろんな人に感謝だ。皆がいてくれなければ、この小説は完成し
なかった。だから、書いたのは私であって私でないような気さえす
る。本当に、嬉しい。とにかく、この喜びを夢人荘の皆に伝えな
い。私は涙まみれの顔を洗い、颯爽と外へ飛び出した。

突然の来訪、そして唐突な受賞の知らせ、そして歓喜に沸く夢人
荘。それが丁度今から二週間前の出来事。今は結構、落ち着いてい
る。携帯にどこからか分からない着信があり、恐る恐る電話を取っ
てみると、それが正式な受賞の知らせの電話だった。あらためて実
感が沸いてくる。身内でなく、全く自分と面識のない人間からの受
賞の知らせが、ある意味で真実味というものを持たせてくれる。

そして、今日はいよいよ授賞式の日。正直、嬉しい気持ちももち
ろんあるのだけど、戸惑いの気持ちも少なからず、ある。父さんと
も対面することになるだろう。その時、私はどんな顔をすればいい
のだろう。父さんは私になんと言葉をかけるのだろう。全く想像が
できない。

寺河さんを始め、夢人荘の皆からの祝福を浴びるように受け、こ
の一週間はとても幸せな気持ちでいっぱいだった。実家にも電話を
した。母さんとだけしか話していないが、母さんも父さんから、私
が受賞したことを聞いたそうで、普段ほとんど笑顔を見せないお父
さんが、嬉しそうな顔をしていた、と言っていた。それだけで、も
う十分な気がした。

家からタクシーで高松駅まで送ってもらい、JRで一時間半程か
けて松山駅に着いた。そこからまたタクシーに乗って約一〇分、四
国共同出版社に辿り着いた。日は大分落ちかけていて、少し肌寒く
なってきた。

何度か外から見かけることはあった。母さんの車で父さんを会社
まで迎えにきたことがあったので、初めてきたという訳でもないの

に、なにか今まで来たことのない場所にきたような錯覚に陥る。ここに自分の要件で来ることが初めてだからなのかも知れない。

受付で、受賞者に郵送で送られてきた授賞式の招待状を見せると、ついさっきまで、愛想笑い丸出しの笑みを浮かべていた受付嬢の笑顔が8割増しになった。なんか笑ってしまいそうになるがぐつと堪えた。

開始が七時なので、三十分程時間があるので、客室を一室用意していますので、係の者が呼びに来るまでお待ちください、と言われたので、おとなしく部屋で待っている。なんだか落ち着かない。他に受賞者がいない賞なので、今日は私だけが賞を頂く人である。ということとは私が今日の授賞式の主役、ということになってしまう。

それはそれで、いささか役不足な感が否めない。一分一分がとても長く感じる。時間が部屋中に堆積して押しつぶされそうになる。早く時間が経たないだろうか、そればかりを考えてしまう。めったにしない腕時計をまじまじと見つめても時間が早く進む訳でもなく、1秒1秒、悔しいくらいに規則正しく針はマイペースに進んでいる。トントン、とドアをノックする音が部屋中に響いた。思わずどきどきとする。慌てて「はい」と返事をする、落ち着かない私。

ドアの向こうから姿を現したのは、小間使いの若手の社員さんかと思ったが、違っていた。よく見知った顔だった。それこそ生まれた頃から。

「お、とうさん」

「美智」

家を出てから全く会っていないので、もう半年以上も会っていないことになる。久しぶりの再会が、まさか父さんの勤める会社の一室になるとは私も父さんも想像できなかったに違いない。

「あ、久しぶりだね。こんなところで会うなんて、ね」

血の繋がった親子のはずなのに、上手く話せない。なんでなんだろう。父さんも伏せ目勝ちで、あまり私の方をまっすぐに見れていないようだ。端から見たら、二人揃ってなんなのだよそよそし

い親子は、と思うことだろう。

「美智。小説、読ませてもらったよ」

父さんが重い口を開く。その声は、いつも私が聞いていた父の声よりも、穏やかで優しさがこもっているような気がした。

「温かい小説だった。よかった」

父さんは恥ずかしそうに、言った。

「小説家になりたいから、家を出るなんて、馬鹿な娘だと、正直思っていたんだが、父さんが間違っていたんだな。悪かった」

「いや、馬鹿な娘なのは間違っていないよ」

軽口を叩いてみる。今日が一番、父さんと素直に話せそうな気がする。

「いや、少なくとも、父さんは誇りに思うよ。美智は正しかった。それが答えだ」

父さんは静かに語っている。その目は少し潤んでいるように見えた。

「式の前に、少し二人で話があったんだ。それに、謝りたかった。式の後もいろいろやることがあった。すぐには帰れそうになかったから」

「今日は実家に帰るから父さん帰ってくるまで私、起きてるから、帰ったら二次会だね」

私がそう言うと、父さんは軽く笑みを浮かべた。そして、式の準備があるから、またあとでな、と言って部屋を出て行った。

ほんのちよつとの会話だったけど、凄く良い、時間だった。

それから待つこと数分、またドアがノックされ、今度は本当に係の若い社員さんが現れた。式の準備が整いましたので、どうぞ、と会場へ促された。

会場に、サルがいると気づいたのは、「四国中央出版小説瀬戸の花嫁文学賞受賞、大向美智さん、どうぞ」

と司会の女の人に呼ばれ、会場に入っすぐのことだった。結婚式場のように、いくつもの丸テーブルがあり、その中の一つに、よく

見知った顔がずらつと並んでいることに気づく。

礼服を着て正装してちよこんと椅子に座っているサル、そんなお行儀の良いサルは私が知る限りは一匹しかない。それは間違いない。モンちゃんだ。パチパチと手を叩いて拍手してくれている。その横には祥子ちゃんの姿もある。丸顔とドレスのアンバランスっぷりがちよつと可笑しい。そして、その隣には寺河さんが天使のような微笑みで拍手をしてくれている。目が合った瞬間、さらに笑みを増した表情を浮かべて祝福してくれている。天使という言葉がこれほど似合う人もいないな、と何度でも思う。

浅田さんとケントも隣り合って座っている。わざわざ愛媛にまで皆で来てくれたのだ。事前に全く知らされていなかったのも、本当に驚いたし、本当に嬉しかった。わざわざモンちゃんの礼服をこの日のために作ったのだろうか、詳細は分からないが、とにかく嬉しかった。

拍手の中を歩き、司会者の方に促され、壇上上がる。拍手が鳴りやまないうちにいいともばりに、ちゃん、ちゃちゃちゃん、と拍手を終わらせた衝動に駆られるがぐつと我慢する。なんだか照明の明るさも手伝ってか頭がぼおつとする。

司会者の方ができぱきと式を進めていく。なにか喋っているな、というくらいの感じだった。劇に出演しているのに、観客席で劇を見ているような気分になる。

「それでは、大向さん、受賞の喜びの声を聞かせてください」
司会者の方がものすごいハイトーンなボイスでそう言ったのが聞こえた。近くにいたスタッフの人がマイクを手渡してくれた。受賞スピーチを振られることを想定して、大体何を話そうかはほんやりと決めていたのに、今頭の中をどれだけ探しても何も入っていない。入ってくるのはせいぜい先程のモンちゃんの礼服装姿くらいだ。

「あ、ええと、今回、賞を頂きました、大向美智と申します」
とりあえず挨拶を試みた。ここからが問題だ。上手に話せる気が全くしない。

「ええと、あの、私は、ずっと小説が好きで、いつからか、読むだけじゃなくて、書く側の人になりたいなってずっと思っていました。でも、小説家になんか、私みたいな特になんの才能もない人間が、ぱつと書けるようなものでもないな、と勝手に思ってた、ずっと避けてきました」

静寂が木霊する。いつもより酸素の濃度が薄い気がする。私は上手く話せているだろうか。

「でも、ある日、とにかく何か動かなくちゃってという気になって、松山の実家を出て、本当は東京に行こうと思ってたんですけど、諸事情がありまして、結局香川県で夢を追いかける決意をして、そこにいるんな人との出会いがあつて、結果この小説が生まれました」
たくさんの目が一身に私を刺す。

「だから、私が書いたっていうよりかは、本当に書いたのが私っていうだけで、本の中身はこれまで出会った人達が考えてくれたようなものなんです。だから、私一人の力で書けたものでは全くないんです」

声に、一本芯が通ったような気がした。今ならちゃんと喋れる気がした。

「今回は、こんな素晴らしい賞を頂けて、本当にありがとうございます。出来るだけ多くの人に、読んでもらって、楽しい時間を過ごしたな、って思ってもらえたら、それより嬉しいことはありません。本当に、ありがとうございます」

次の瞬間、拍手の歓声が沸いた。

その後は、記念の賞状や、賞金、出版次期のお知らせ等が粛々と続いた。程無くして、式は終りを告げた。長いようで、短いような一日だった。でも、私はこの日を決して忘れないだろう。

時間は止まってくれない。当たり前のことだけど、それが普通なのだけど、それでも、やっぱり私も周りも変わっていくわけで。それが良いとか悪いとかは別にして、少しばかり寂しくなったりもす

る。

晴れてめでたく受賞となった私の処女作は、幾度もの改稿を経て、担当編集者の人と綿密な打ち合わせを行い、なんとか出版できる運びとなった。

自分の書いた本が本屋さんに並ぶなんて、そんなことが現実にかかるなんてなんて、言葉にどう表わしたら良いか分からないくらいの感動だ。

実は、もうあれから半年が経過している。

あの頃ここに住んでいた人で、この夢人荘に残っているのは私だけだ。

浅田さんは、漫画賞を受賞した直後に埼玉に引っ越した。なにかと都心の方が便利だし、打ち合わせもしやすいし、アシスタントも見つかりやすいからな、と平然としていたけど、それはフリだけで引っ越し当日に、皆に見送られた浅田さんは、思いっきり泣いていた。

ありがとう、皆、ありがとう。ミッチー、お前のお陰だ。本当にありがとう。

あんな素直な浅田さんを見たのは、初めてだ。きっとあれが最初で最後になるだろう。

今でも、浅田さんは私の原作でマンガを描いている。なので遠くに行ってしまうてはいるけれど、電話やFAXで、週に3回はやりとりしているの、あまり遠くにいつてしまったような感じはしない。その電話も「2年後にはアニメ化だな」「はつきりいつて俺のマンガより面白いマンガはないんじゃないか」「ミッチーより先に売れっ子になってしまっわ、悪いな原作者。ハッハッハ」などとほとんどは作画担当と原作者のやり取りというよりは、ただの友達のようなたわいのない話になってしまったりするので、浅田さんがいつマンガが売れなくなって食いつぱぐれて帰ってきてても温かく迎えてあげるようにしようと思う。

祥子ちゃんとモンちゃんは、日光江戸村からきたオフアートを結局

断って、今は全国各地を猿回し行脚している。商店街や、山間の村にもわざわざ足を運び、あまり遠くに足を運べないお年寄りや、子供達に芸を披露し、好評を博しているようだ。こないだ電話で話した時には、「モンちゃんにガールフレンドが出来たんです！」というよくわからない報告を受けたが、あまり深く聞く元気もなかったので、そこはさっと流してしまったのけど、とにかく元気でやっているようだ。

たくさんの人を笑顔にしているということは、とても凄いことだと思っし、もうゴミ捨てをするサルを見れなくなるのはちょっと寂しい気もするけど、素敵な生活をしている祥子ちゃんを、私は微笑ましく見守っていいこうと思う。

ケントは、元々夢人荘に部屋を借りていなかったし、後で知った話では、どうやらここに来た時はいつも寺河さんの部屋に泊っていたそう、これは間違いなく二人は何かあるのだろうけど、寺河さんには絶対聞けない。天使の笑顔を崩してしまいそうな気がして、いたたまれない気持ちになるのが怖いので、気にならないこともないけれど、あえて何も聞かないことにした。触らぬ神にたたりなしだ。

そんな訳で、全部で4つある部屋のうち、3つが現在空家である。皆、夢を叶えるためにここを出ていく。もしくは、夢を叶えたから、ここを卒業していく。きっと、夢を叶えることができず、叶わないままここを跡にした人もいるのだろう。

そんな人達の気持ちも全部抱えて、私は頑張っていきたいと思う。実は今、四国共同出版の人が、提携している東京の、ある出版社に頼んで、次回作をその出版社の発行している雑誌で連載ができるように掛け合ってもらっているそうで、デビュー作を読んで貰ったらしく、結構好感触だそうで、もし実現したら、いよいよ本格的に作家として歩いていけそうな気配だ。

風が静かに流れている。温かい。空はとても明るく、それだけで幸せな気分になれる。すっかり見慣れた夢人荘のベランダから見

「あ、ええ、まあ、そうですね」

菊池君は恍惚の表情を浮かべながらなにやらうねうねしている。言っちゃ悪いが気持ち悪い。

「あ、すいません、いきなりもだえちゃって。気持ち悪かったですね」

自覚症状は一応あるようなので少し安心した。

「いや、だ、大丈夫。でもそんな大したことないよ、私は」

「いやいやいやいやいやいや何をおっしゃいますやら」

顔の前で垂直にした右の掌を高速で左右にぶんぶん振っている菊池君。

「それはもう僕の中では凄い人ですよ。うん」

菊池君はサインもらっところかな、とかなんとか呟いている。

「あの、とりあえず大家さん呼んでこようか？」

「あ、あ、はい。すいません。おかまいなく、お願いします！」

どっちやねん、と内心ツツこみながら私はくるりと振り返り、寺河さんの住む部屋へと歩みを進める。

それにしても、ここには変な人しか集まらないような何かがあるのだろうか。まともな人が私以外いない、このへんてこりんなアパートが、結構好きだったりするのだけど。いや、私も十分まともじゃないか。あは。

瞬間、風が強く吹いた。私は、思わず空を見上げた。やっぱり空は、これ以上ない快晴。なんだか、風に乗ってどこまでもいけそうな気がした。

時間の流れと共に、色々なものが変わっていくけれど、変わっていきける、それがとても嬉しい。心から、そう思える。

明日はもっと、良くなる。今日の私が今を楽しめれば。すべてが、私を前に進めてくれる原動力になる。

馴染みの人達がいなくなつて、少し寂しくなつたこの夢人荘も、また新しく、夢を持った人達がやってきて、循環していくことだろう。それに、今は目の前からいなくなつてしまった人達も、どこかでま

た会うことができるだろう。私が前を向いて生きている限り、可能性はどこまでも広がっていく。

ポケットに入れている携帯がブルブルと震えている。電話だ。液晶画面には祥子ちゃんの名前が出ている。やった、久しぶりに話せる。もしかしたら、近くまで来ているのかもしれない。私は寺河さんを呼びに行くこともそっちのので、携帯の着信ボタンを押した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7568s/>

夢人荘の人々 後編

2011年4月26日11時55分発行